

## ローザンヌ大学ワルラス文庫所蔵 ジェヴォンズ『経済学の理論』 三つの版(1871, 1879, 1909) をめぐって

御崎加代子

Kayoko Misaki

滋賀大学 経済学部 / 教授

## はじめに

ジェヴォンズ (William Stanley Jevons, 1835–82) とワルラス (Léon Walras, 1834–1910) の名は、1870年代の限界革命の担い手として、さらには新古典派経済学の元祖として、今日あまりにも有名である。二人が数学を用いた限界分析によって、現代経済理論の礎を築いたことに疑いの余地はないが、その一方で、限界革命や新古典派といった概念が、両者の経済思想の違いを曖昧にしていることも事実である<sup>1)</sup>。

本研究ノートの目的は、ワルラスが所蔵していたジェヴォンズの『経済学の理論』の三つの版への書き込みの特徴とその背景を整理することである。これは、限界革命や新古典派の誕生の知られざる思想的背景を解明する出発点となるであろう。

### I ローザンヌ大学ワルラス文庫が 所蔵するジェヴォンズの著作

ローザンヌ大学のワルラス=パレート研究所には、ワルラスの蔵書が保存されたワルラス文庫がある。筆者は1998年に初めて同研究所を訪れて以来、ワルラス文庫の調査にとりくんできた。ワルラスは読書の際、ページに直接メモを書き込む習慣があったため、この書き込みの検討はワルラスの経済学過程を探るうえで、有力なヒントとなりうる<sup>2)</sup>。

2005年、ワルラス文庫の完全な目録<sup>3)</sup>が、『ワルラス父子経済学全集』<sup>4)</sup>の最終巻に掲載されて以来、調査はより容易なものになった。この目録には、各蔵書への書き込みの有無も示されている。ただし注意すべきなのは、蔵書への書き込みがワルラ

1) このような問題意識を持った論文の代表的なものは、Jaffé (1976) である。

2) ちなみに、同研究所にはパレート文庫もあるが、パレートには書き込みの習慣がなかったため、同じような研究アプローチは不可能である。

ス以外の者による場合もありうるという点である。この目録はその区別について示すことは断念している<sup>5)</sup>。したがって、ワルラス文庫の調査は、蔵書への書き込みがワルラス自身の筆跡であるかどうかの検討、あるいは他のワルラスの著作からの裏付けが必要不可欠である。

ワルラス文庫の目録によれば、ワルラス文庫に存在するジェヴォンズの公刊物は14点である。このうち、書き込みがある著作は、以下の5点である。

1. Jevons, William Stanley. 1871. *The Theory of Political Economy*. London and New York: Macmillan.
2. Jevons, William Stanley. 1879. *The Theory of Political Economy*, second edition, revised and enlarged. London and New York: Macmillan.
3. Jevons, William Stanley. 1909. *La Théorie de l'économie politique*. Paris : Giard & Brière.
4. Jevons, William Stanley. 1876. *La Monnaie et le mécanisme de l'échange*. Paris : Germer Baillière.
5. Jevons, William Stanley. 1884. *Investigations in Currency and Finance*. H.S. Foxwell ed. London : Macmillan.

このうち明らかにワルラスの筆跡で、多くの書き込みが確認できたのは1から3である。それらはそれぞれジェヴォンズの『経済学の理論』の初版(1871年)、第2版(1879年)そして仏語版(1909年)である。初版と第2版には、ジェヴォンズからワルラスへの献辞が記されている。実は、ワルラス

文庫所蔵の『経済学の理論』にはもう一点、伊語版<sup>6)</sup>があるが、これには書き込みがない。本稿で注目するのは、書き込みの入った『経済学の理論』の3つの版、1から3である。

## II 『経済学の理論』初版(1871)

ワルラスがジェヴォンズを知ったのは、1873年8月にパリの学会で、論文「交換の数学的理論の原理」を発表したことがきっかけである。同じような理論をすでにジェヴォンズがイギリスで、2年前の1871年に『経済学の理論』で発表していたことを、人から知らされたのである。ワルラスがジェヴォンズに初めての書簡を送ったのは、1874年5月1日であり、二人の文通が、ジェヴォンズの亡くなる1882年まで続くことになる。ワルラスはフランス語の手紙を書き送り、ジェヴォンズは英語でそれに返答するという形である。

最初の書簡の内容は次の通りである。

「ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ様

1874年5月1日 ローザンヌにて

拝啓

本日、郵便にて私の著作をお送りいたします。あなたに注意を向けていただきたい著作です。

私はちょうど『政治社会経済学概論』の公刊を始めようとしているところです。その第1巻は純粹経済学にあてられますが、研究に数年かかり、そのため重要と考えている『交換の数学的理論』を含んでいます。私はこの理論の原理を昨年の夏に、フランス学士院で発表しました。あなたにお送りするのは、この報告論文です。

3) Walras, L. 2005.

4) Walras, Auguste. et Léon Walras, 1987-2005.

5) Walras, L. 2005, p. 174.

6) Jevons, William Stanley. 1878. *La Teorica dell'economia politica*. Biblioteca dell'economista, serie terza : Vol.2. Gerolamo Boccardo éd. Torino: Unione tipografico-editrice. pp. 173-311.

この理論は、おわかりのように、抽象的な性質をもっているので、あらかじめ専門知識のある方々の承認を得なければ、一般の人々に浸透させることはできないと考えています。イギリスでのあなたの高い学問的地位と、素晴らしい業績の特別な性質により、私はあなたの判断が最も価値のあるものと考えます。このような手続きを踏んでいるのは、特別な計らいをお願いしたいからです。したがって、どうか私の著作に目を向けていただきたいのです。もしそれに価値がないと思われるとしても、お時間をとっていただいたことで私は自分をとがめる必要はないでしょう。逆にもしそのテーマがより深い検討に値すると思われるのでしたら、できる限り早く、私の著作を一冊お送りします。

敬具

レオン・ワルラス]

(Walras, L. 1965, vol. 3, p. 445. letter 1783)

この書簡にあるように、ジェヴォンズに最初の書簡を送った当時、ワルラスは『純粋経済学要論』（初版1874-77）の公刊の準備をすすめているところであった。歴史上はじめて一般均衡理論を展開したこの著作が、現代経済理論の出発点となることは周知の事実であるが、興味深いのは、この当時のワルラスは、純粋経済学だけではなく、社会経済学、応用経済学も含めた三つ経済学体系—政治社会経済学 (Economie politique et sociale) の著作を発表するつもりであったということであり、ジェヴォンズにもそれを知らせているということである。結局、社会経済学と応用経済学については、ワルラスは純粋経済学のような体系的な著作を残すことはできなかった。

この書簡に対する1874年5月12日付のジェヴォンズの返信と、それに対するワルラスの5月23日付の書簡は、のちにワルラスの『社会的富の数学的理論』（1883）にもおさめられ、広く知られることになった<sup>7)</sup>。

ジェヴォンズは5月12日付の返信の中で、ワルラスの理論をすでに知っていたうえで、自らの理論の独創性と優先権を主張し、『経済学の理論』を一冊送ってほしいかどうか尋ねている。それに対する5月23日付のワルラスの返信は、ぜひ送ってほしいというものであった。ワルラスはこの書簡の中で、ジェヴォンズの優先権を認めるとともに、自らの発見の独立性を強調し、これら二つの書簡を公表することを提案したのである。

ワルラス文庫所蔵のジェヴォンズの『経済学原理』（1871）は、このような状況の中で、ジェヴォンズからワルラスに送られたものである。タイトルページの冒頭には、5月26日付のジェヴォンズの献辞“M. Léon Walras, with the author's compliments Manchester May 26<sup>th</sup> 1874”が記されている。

この本を受け取ったワルラスは、同年7月29日付で、ジェヴォンズに返信を送った。

「1874年7月29日 ローザンヌにて  
拝啓

あなたの本と、あなたがその後に出された素晴らしい手紙は、同時に私のところに届きました。あれ以来私は、6月はずっと自分の著書の出版のために、そして7月は学年末試験のために、とても忙しかつたのです。公刊された著書を今日あなたに急いでお送りします。私は休暇の最初の日々を利用して、あなたが提案してくださり私が心から応じ

7) Walras, L. 1993.

た友情にあふれる文通にとりかかっています。この文通をきちんと続けたいと強く思っています。

あなたの素晴らしい著書について、一読しただけでは、我々が付随的な点においてどのように意見を異にするのかを示し、またそれらの違いについて議論するには、全く不十分でしょう。私はいくつかの急ぎの仕事を終え次第、この著作について、フランス語の逐語訳を作成するつもりです。そうすることによって、それを理解し、詳細について批判することができるようになるでしょう。そしてこの作業を行った後、私はあなたと議論できる状態になり、またあなたの考えをフランスの読者たちに、もし事情が許せばもれなく知らせるのがよいし、あるいは少なくとも論文で知らせることができる状態になるでしょう。(以下略)」

(Walras, L.1965, vol.1, p.413, letter 286  
下線は御崎による)

ワルラス文庫の『経済学の理論』(1871)には、この書簡(下線部)に示されているように、ワルラスがフランス語の逐語訳にとりくんでいる形跡が残っている。特に「序文Preface」には、簡単なものも含めて多くの英単語にフランス語で意味が記入されていることに驚いた。これはワルラスの几帳面さを表していると同時に、英語能力があまり高くなかったことも示していると考えてよいだろう。逆に言うと、ワルラスが多くの英単語に意味を記している部分を確認することによって、ワルラスがジェヴォンズ『経済学の理論』のどの部分に興味を持っていたのかを知ることができるかもしれない。

ワルラス文庫『経済学の理論』初版で書き込みがあるのは以下の章である。

序文(Preface)

第1章 Introduction

第5章 労働の理論(Theory of Labour)

第6章 地代の理論(Theory of Rent)

第7章 資本の理論(Theory of Capital)

このうち、「序文」と、「第1章」の途中にかけては、ほとんど英単語ごとにフランス語で意味が記されている。「第5章」、「第6章」、「第7章」については、英単語の意味だけでなく、内容に関するコメントも書きこまれている。

意外なのは、第2章、第3章、第4章に書き込みがないことである。これらはそれぞれ「快苦の理論」、「効用の理論」、「交換の理論」に対応し、ジェヴォンズとワルラスが共有する限界効用理論に最も関連する部分である。前述の7月29日付のジェヴォンズへの手紙でワルラス自身が『経済学の理論』の仏語訳を出すことを希望しているとも取れる部分(下線部)があるにもかかわらず、これらの章を一字一句読んだ形跡がないことを、どう理解すべきか、さらなる検討が必要であろう。

### III 『経済学の理論』第2版(1879)

ワルラス文庫の『経済学の理論』第2版のタイトルページには、1879年8月付のジェヴォンズからの献辞“Léon Walras with the author's kind respects Aug.1879”が記されている。これに先立つ1879年2月21日付でジェヴォンズからワルラスへ送られた書簡<sup>8)</sup>には、『経済学の理論』の第2版の公刊を決意した旨が記されていた。それに対してワルラスが、返信をしたのは、実に1年以上たってから1880年3月であった(日付なし)<sup>9)</sup>。この中で、

<sup>8)</sup> Walras, L. 1965, vol.1, pp.599-600, letter 433.

<sup>9)</sup> Walras, L. 1965, vol.1, p.645-647, letter 465.

ワルラスは、1879年6月8日に妻を亡くしたこと、その後、休暇中は娘と旅に出ていたため、『経済学の理論』第2版には、1879年の秋にやっととりかかったことを知らせ、次のように述べている。

「それからは、最初から最後のページまで完全な訳を作成しました。私の考えでは、それはこのような性質の著作を本当に理解するための唯一の方法なのです。」

(Walras, L.1965, vol.I, p.645)

この一文について、書簡の編者であるジャッフェは注をつけ、この翻訳についていかなる草稿もみつからなかったと述べている。一体、その訳はどこにあるのだろうか。

ワルラス文庫の『経済学の理論』第2版への書き込みで目を引かれるのは、目次の小見出しのいくつかに×が入っており、本文中の対応する小見出しにも×が入っていることである。これは憶測の域を出ないが、これがワルラスの訳出作業と何か関係があるのかもしれない。以下が、×印の入った小見出しである。

Disutility and Discontinuity  
Theory of Dimensions of Economic Quantities  
Popular use of the term Value  
The Law of Indifference  
Analogy to the Theory of the Lever  
Competition in Exchange  
Negative and Zero value  
Relation of Economic Quantities  
Joint Production

Dimension of Capital, Credit and Debit  
Peacock on the Dimension of Interest

さて、ワルラス文庫『経済学の理論』第2版の書き込みで最も目を引かれるのは、「序文」である。前述の1880年3月付の書簡において、ワルラスはジェヴォンズに、第2版の序文の最後の内容が混乱しており、リカード理論の批判として不十分であることを指摘し、自分自身はさらに先に進むことを述べている<sup>10)</sup>。実はこの点について、ワルラスは『純粹経済学要論』の第2版(1889年)以降の序文でも触れている。

「ジェヴォンズは『経済学の理論』の第二版において、初版では見落としたものを認めた。それは、もし最終効用度が生産物の価格を決定するというならば、それは同時に生産用役の価格すなわち地代、賃金、利子を決定するということである。なぜなら、自由競争の規制の下においては、生産物の価格とその生産用役の費用とは一致する傾向があるからである。1879年5月に彼はその著書の第2版序文の最後の10ページ(pp.XLVIII-LVII)にわたる極めて興味ある叙述において、イギリス学派の方式あるいは少なくともリカード・ミル学派の方式を逆転して、生産用役の価格により生産物の価格を決定する代わりに、生産物の価格により生産用役の価格が決定せられると明確に述べている。」(Walras, L.1988, p.17. 久武訳 p.xvi)

ワルラス文庫の『経済学の理論』(第2版)には、ここに述べられているように、ワルラスがその最後の10ページを詳細に検討した痕跡が残っている。同書のxlviiiiページからlviiページまで多くの英单

<sup>10)</sup> ワルラスのジェヴォンズ『経済学の理論』第2版へのコメントについては、井上(1987)第6章も参照されたい。

語に仏語で意味が記され、コメントも記入されている。ワルラスがこの第2版序文の最後の10ページを詳細に検討したことは間違いない。それとは対照的に、本文中にはほとんど書き込みがないことも印象的であった。

最後に指摘しておかなければならないのは、第2版の付録Iの数理経済学の著作リストに多くの書き込みがあることである。ワルラス自身が自らの一般均衡理論の先駆者を誰と考えていたのかを知るための貴重な書き込みであり、詳細な分析は別稿にゆずりたい。

#### IV 『経済学の理論』仏語版(1909)

ジェヴォンズは、1882年8月13日に不慮の事故で亡くなった。ワルラスがジェヴォンズに宛てた最後のメッセージは、その2か月ほど前の1882年6月24日付で、カードに書かれた数行の短いものであった。体調の悪さのため、ジェヴォンズが最新の著作 *The State in Relation to Labour* (1882) を送ってくれたことに対してお礼ができないと記されている<sup>11)</sup>。この著作は残念ながら、ワルラス文庫には残っていない。

ワルラス文庫所蔵『経済学の理論』仏語版が公開されたのは1909年であり、ワルラスの亡くなる2年前であった。結局ワルラス自身で、『経済学の理論』の仏語版を公開することはなかったが、この仏語版『経済学の理論』には、きわめて多くの書き込みがなされ、英語の苦手なワルラスがやっとジェヴォンズの著作の全貌に取り組めた形跡がうかがえる。

仏語版への書き込みは、当然ながら訳語のメモではなく、内容についてのコメント、アンダーライン、

欄外の縦線や×印などである。そして書き込みが集中しているのは、意外にも第5章「労働の理論」である。

仏語版『経済学の理論』に晩年のワルラスが加えた書きこみを詳細に検討することによって、ワルラスのイギリス古典派批判の論理、ならびに労働観におけるワルラスとジェヴォンズの相違を明らかにすることが今後の課題である。

#### 【付記】

本研究は、2018年3月に実施したローザンヌ大学ワルラス文庫の調査に基づく。これはJSPS科研費17K03642「ワルラス一般均衡理論の思想的起源の解明—ローザンヌ大学ワルラス文庫を手掛かりに」の研究プロジェクトの一部である。

#### 参考文献

1. Jaffé, William. 1976. Menger, Jevons and Walras De-Homogenized. *Economic Inquiry* 14, no. 4: pp. 511-24.
2. Jevons, William Stanley. 1871. *The Theory of Political Economy*. London and New York: Macmillan. (ローザンヌ大学ワルラス文庫)
3. Jevons, William Stanley. 1879. *The Theory of Political Economy*, second edition, revised and enlarged. London and New York: Macmillan. (ローザンヌ大学ワルラス文庫)
4. Jevons, William Stanley. 1909. *La Théorie de l'économie politique*. Paris: Giard & Brière. (ローザンヌ大学ワルラス文庫)
5. Walras, Léon. 1965. *Correspondence of Léon Walras and related papers*, edited by William Jaffé. 3 vols. Amsterdam: North-Holland.
6. Walras, Auguste et Léon Walras, 1987-2005. *Auguste et Léon Walras. Œuvres économiques complètes*. Edités par Pierre Dockès et al, 14 vols, Paris: Economica.

11) Walras, L. 1965, vol.1, p.724, letter 531.

7. Walras, Léon. 1988. *Eléments d'Economie Politique Pure, ou Théorie de la Richesse Sociale*, in Walras et Walras (1987-2005), vol. VIII. (久武雅夫訳『ワルラス 純粋経済学要論』岩波書店, 1983)
8. Walras, Léon. 1993. Correspondance entre M. Jevons et M. Walras, In Walras et Walras (1987-2005), vol. XI: *Léon Walras, Théorie mathématique de la richesse sociale et autres écrits d'économie pure*, pp. 47-52. (柏崎利之輔訳「ジェヴォンズ氏とワルラス氏との間での往復書簡」『社会的富の数学的理論』日本経済評論社, 1984.)
9. Walras, Léon. 2005. Imprimés Conservés par Léon Walras, In Walras et Walras (1987-2005), vol. XIV: *Auguste Walras Léon Walras, Tables et Index*, pp. 163-352.
10. 井上琢智. 1987. 『ジェヴォンズの思想と経済学：科学者から経済学者へ』. 日本評論社.

## Three versions of Jevons' *Theory of Political Economy* (1871, 1879, 1909), preserved in the Walras Library at the University of Lausanne

Kayoko Misaki

This study examines the handwritten notes of Léon Walras (1834–1910) in three versions of William Jevons' *Theory of Political Economy* (1871, 1879, 1909), which belong to the Walras Library at the University of Lausanne.

According to the textbook interpretation, Walras and Jevons were the founders of the marginal theory of value and of neoclassical economics. Although it is true that they contributed much to the making of modern economic theory, the concepts of marginal revolution and neoclassical economics cloud the difference between Walras's and Jevons's economic thoughts. In order to show how Walras read Jevons's *Theory of Political Economy*, this study examines not only his handwritten notes but also his correspondence with Jevons and his other related writings. By shedding new light on Walras's criticism of British classical economics, which he shared with Jevons, and the difference between his concept of labour and that of Jevons, it will offer a significant key to clarifying the unknown aspects of their relationship, the origins of neoclassical economics, and the process of formation of Walras's general equilibrium theory.